仮面ライダーブレイヴ

みやびわたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーブレイヴ

【Ｎコード】
Ｎ８０１０Ｘ

【作者名】
みやびわたる

【あらすじ】
“感情”。それは如何なる状況においても、人類の歴史と密接に関係している。ある日、感情に反応するという未知の鉱物『フィーリウム』が発見された事で、平凡な日々に大きな変化が生まれた。しかしそれが、数多の人々の運命を変えてしまう闘いの引き金になるとは、誰も予想していなかった。様々な欲望や願いが交差する日々に現れた仮面の戦士、ブレイヴ。勇気の化身は正義と悪が入り交じる世界で、自らの信念を貫けるのか。

序章．ＰＲＯＬＯＧＵＥ～業火と青年～（前書き）

はじめまして。みやびわたると申します。はじめての執筆なので、かなりグダグダになると思いますが、読んで頂けると嬉しいです。

序章．ＰＲＯＬＯＧＵＥ～業火と青年～

その日はいつもと様子が違っていた。曇り空が紅蓮に照らされている。町外れに建てられた巨大な研究所が爆炎をあげながら燃えているのだ。科学薬品や精密機器が大量に置いてあるせいか、火の勢いは止まるどころか逆に強くなっていく。

そんな地獄と化した敷地の中を、１人の青年が息を切らしながら走っていた。

「……ハァ、ハァ…ハァ……」

服装から察するに高校生のようだが、服が所々焼け焦げていたり無数の切傷があったりとボロボロである。

「……ハァ…ハァ…、…もうすぐ……出られるぞ……」

手に持っている物としたら学生鞄、そして黒と藍色の無骨な機械ぐらいだ。携帯もあるが場所が場所だ。電話なんてこの火の海の中では何の役にも立たない。それにこれだけの大火災だ。既にほとんどの人が気付いている筈。それなのに誰も来ないということは、近付けないくらいの被害だという事。助けは来ない。だったらひたすら走って此処を出る。それが今の彼が考えられる最善の策だ。

しばらく走っていると、１５０ｍくらい先に正門が見えてきた。「よし、もう少しだ」と青年が思ったその時、

“ヤツ”はそこにいた。

正門と青年の間に入るように“そいつ”は此方を睨んでいた。人…ではない。鎧のような物を纏って2本足で立ってはいるが、人とは似ても似つかない姿をしている。

『グブルルル……！！』

異形はどす太い唸り声をあげる。明らかに敵意があるようだ。気の弱い人がそんな光景を見たなら、あまりの恐怖で動けなくなってしまうだろう。

「……」

だが青年は、落ち着いていた。じっと異形を見据え、静かに呟く。

「……どうやらアナタは、さっきの怪物と同種みたいですね」

彼は手に持っていたゴツゴツとした機械を右腰に当てがう。すると

機械から帯が飛び出し腰の周りを一周すると、カチャッという音と共に機械にはまり無骨な形状を安定させる。

「……僕には…やらなきゃならないことがある。……こんなとこで死ぬ訳にはいかない。……そこ……通してもらいますよ」

独り言のようにボソボソと呟いた後、懐から取り出したメモリーカードのような物を、機械の側面にあるスロットに差し込む。

［ゼントル……スタンバイ］

機械から電子音声が流れ、対峙した両者が構える。そして青年は静かに言った。

「たとえ孤独でも、僕は闘う。皆を…護るために。……変身」

［ゼントル……セットアップ］

それは、目の前にいる敵に対して、未来で待ち受ける運命に対して、そして自分の心に対して突き付けた、自らの覚悟を意味する言葉だった。

序章・ＰＲＯＬＯＧＵＥ～業火と青年～（後書き）

改めまして、はじめまして。みやびわたるです。僕のつたない駄文を読んで頂き、……っっありがとうございますｍ（　　）ｍ！！！！それにしても、小説って文章だけで情景を表現しなきゃいけないから、思った以上に難しいですね……。感想でアドバイスとかいろいろ指摘して頂けると幸いです。更新時期については、ペースを掴めるまでバラバラになってしまうと思います。ご了承下さい。それでは、これからよろしくお願いします！！

第１話．ＢＥＧＩＮＮＩＮＧ～科学者とフリーター～（前書き）

どうも、みやびわたるです。第１話、書き上げました。５０００字って結構な量行くんですね（ーｏ－；）。１００００超える人はすごいなぁ…。では、スタートです！！！

第1話．BEGINNING～科学者とフリーター～

初夏、草木も青々と茂ってきている。気温も日に日に上がっていて、夕方になっているにも関わらず、体感温度は確実に高くなっていく。

「……あ、あぁ…暑ぃ…」

「もうっ、そんな今にも死にそうな声出さないでよ～。びっくりしちゃったじゃん」

2人の若い男女が会話しながら、繁華街を歩いている。

「んな事言ったってよ…。このところ毎日ピンカン晴れだぜ？鈴奈、お前よく平気でいられるなぁ？」

所々くせ毛で、赤毛の混じった黒髪の青年、笹原翔（ささはらしょう）がダルそうな顔で答えた。

「翔ちゃんが暑がりすぎなの。まだ夏にもなってないんだし…、周り見てもダルダル～ってしてる人は翔ちゃんぐらいです！！」

セミロングの黒髪の女性、旭鈴奈（あさひすずな）はキッパリと言い切る。

「へいへい、可愛くなる為とか言ってる鈴奈だったら、暑さなんか気になりませんもんな～」

「へ？か…かわ…かわい？……え…えぇと、えと……そ…そんな……こと…ないょ……」

鈴奈は翔の言葉に激しく動揺した。鈴奈と翔は幼稚園からの幼なじみ。互いの両親も仲が良かった事もあってほとんどの時間を家族のように一緒に過ごしてきた。そうしている内に、鈴奈はいつの間にか翔に恋愛感情を抱くようになっていたのだ。

そんな彼女は顔を真っ赤にしてモジモジと下を向いてしまう。翔本人は皮肉で言ったつもりなのだが……。

「ん？鈴奈、どうした？顔赤いけど、大丈夫？」

「……あっ、え…いや、これは…えとぉ……そのぉ…」

翔は鈴奈の変化に気付き、屈んで鈴奈の顔を覗き込む。急に覗き込まれたことで鈴奈の焦りは最高潮になってしまう。翔はそんな彼女を見て、

「……なるほど。そうだったのか」

と何かを察したような顔をしている。鈴奈が「一体何が解ったんだろう？まさか……、」とドキドキしていると、

「……鈴奈、……やっぱりお前も暑いんじゃん！暑いなら暑いってそう言えばいいのによぉ……。」

「……え？」

翔の見当外れな言葉に鈴奈は唖然としてしまう。

「ハァ……。オレには暑がりとかダルダルとか言っておいて、自分だって変わんないじゃんかよ～。ホントに大丈夫？あんまり我慢しちゃダメだぜ？」

「……う…うん。ごめん……」

鈴奈は翔が心配してくれる事に感謝しながら、内心複雑な気持ちだった。翔が恋愛とかの類いに対して疎いのは、子供の頃からあんまり変わっていない。デートに行っても、プレゼントをあげても、翔は彼女の気持ちにはまったく気付いていない。鈴奈とは家族のような関係だと思っているから尚更なのだが、此処まで度を超える疎さを持つ、恋愛の「れ」の字も知らない男を見ていて、鈴奈は焦りや不安を感じているのだ。

「でも、鈴奈にはオレの就活に付き合ってもらった訳だし、それで体調崩されちゃったら鈴奈の母さん達に申し訳ないしな……。ありがとな」

しかし性格はとても優しく、いざという時は頼りになる。そんな彼の人柄に、鈴奈は惹かれているのだ。

「ううん、あたしは平気だよ。それより、今回の面接はどうだったの？」

「……今回も多分ダメだろうなぁ。何社も受けてるとわかるんだよ。落ちる時の面接官の顔とか、声の感じとかでさ…。……くそっ、

この状態で1年経つよ……」
高校卒業後は完全に独り立ちさせる、という笹原家の教育方針に従って翔は家を出た。しかし部屋を借りるお金もなかった為、鈴奈の叔母、旭奈津子(あさひなつこ)が営んでいる喫茶店の2階に住み込みで働かせてもらう事になった。

ただ住まわせてもらってちゃダメだと思い、翔は休みの日にいろいろな会社の面接に行っていたのだが、なかなかいい結果を得られずに現在に至ってしまっている。

「……仕方ないよ。最近は就職難って言われてるんだもん…。それにもしダメでも、奈津子さんの喫茶店があるんだし……。……次、頑張ろ?」

「……そうだな。……じゃあ、そろそろ帰ろっか?」

「うん!!」

2人が家路につこうとしていると、

「ちょっ、止めてください!!!」
何処からか女性の声がした。声のした方を見ると、女子高生が2、3人の不良に囲まれていた。

「へへへ、いいじゃん。遊ぼうぜ」

「そうだよ。ほんのちょっとだけだって」

「……誰か…助けて……」

少女は困り果て、今にも泣きそうな顔で周りに助けを求めている。

「ドラマとかでああいう人達を見るけど、ホントにいるんだね。ねぇ、翔ちゃん……ってアレ？翔ちゃん？」

鈴奈は不良と女子高生を見た後、翔のいる方を見る。だがそこに翔の姿は無く、彼が着ていたスーツの上着と鞄が放り投げてあった。そしてもう一度さっきの男達を見ると、

その時不良達は、怖がっている少女を無理矢理連れていこうとしていた。たが突然、

「グアッ……！！」

「おい、お前ら！何やってんだぁ！！」

「あ゛？何すんだよこの野郎…ぅぼぉ！！」

翔が不良達の1人に殴りかかっていた。そしてそれに気付いたもう1人の顔面に裏拳をかます。

「あっ、今の内に逃げて！！」

「……は…はい！！」

「チィッ、逃がすかよ！！」

翔に呼びかけられた女子高生は言われた通りに逃げようとする。だがそれに気付いた残りの1人が彼女を追いかけ、捕まえてしまう。

「きゃああ！！」

「へへへ、捕まえたぜ……。おい、スーツ野郎！！こいつがどうなってもいいのかよぉ！！！」

男はポケットから折りたたみナイフを取りだし、少女に突き付ける。

「クソッ！！」

人質を捕られ、注意が逸れた翔を見て、劣勢だった2人が好機とばかりに翔をタコ殴りにする。

「はっ、動きが急に鈍くなったなぁ、おい！！！」

「グハッ！ぐっ、ガハッ！！」

そんな光景を、鈴奈が心配そうな顔で見ていた。

「……もぉ、何やってるのよ～。でも、あたしが行ってもなぁ…。……どうしよぉ……やっぱりあたしが……！！」

鈴奈は翔達の方へ走り出そうとした……その時、

「……待ってください」

鈴奈は突然後ろから声をかけられた気がした。振り返ってみると、白シャツ、黒のジーンズを着て、天パで黒髪の若い青年が此方を見ていた。青年は翔を指差しながら鈴奈に尋ねる。

「あの、彼のお知り合いの方みたいですけど……、よろしければ僕が行きましょうか？」

「え？でも……」

鈴奈は突然の出来事に、どう答えたらいいのか解らなかった。鈴奈が戸惑っているのを見て、青年は続けた。

「大丈夫です。すぐに終わらせますから」

彼はそう言うと、身を屈めて静かにナイフを持った男に近づいて行った。

ナイフを持った男、原田俊也（はらだとしや）は自分の仲間に殴られている翔を見てほくそ笑んでいた。
「へへへ…。どいつもこいつも、俺に楯突くから悪ぃんだよ……」
ナイフを突き付けられた女子高生は涙目になって震えていた。どんなにもがいても、体格の差もあってビクともしない。

「あの……」

横から急に声をかけられた事でビクッとなってしまった原田だが、すぐに冷静になるとナイフを持った右手が掴まれている事に気付いた。掴んだ手を目で辿っていくと、そこには優しそうな青年が立っていた。

「彼女、怖がってるみたいですよ。離してあげてくれませんか？」

「なっ、何だお前。離しやがれ！！」

原田が手を振りほどこうしたが、その腕はほとんど動かなかった。外見は非力に見えるがその力は本物だ。表情はにこやかではいるものの、その目は恐ろしい程の迫力に満ちている。

「離すのは……アナタです……！！」

「痛っ！！…ぐあっ！！」

青年は原田の右手を外側に捻りながらナイフをはたき落とすと、流れるような動きで女子高生を原田から引き離し、原田を蹴り飛ばして距離を取る。彼は少女の無事を確認すると翔に向かって叫んだ。

「キミ!!こっちはもう大丈夫です!!」

それを聞いた翔は、男達の1人が放ったパンチを左手だけで受け止めると、

「誰だかわかんないですけど、ありがとうございます!!」

掴んだ腕をグイッと引き寄せると、男の顔面に渾身のパンチを放つ。男が倒れるのを見る間もなく、後ろから襲いかかるもう1人に後ろ回し蹴りを打ち込んで卒倒させた。

「さぁ、後はアナタだけですよ?」

青年は翔が不良2人を一発K．O．させたのを見て、最後に残った原田に問いかける。

原田は思考を巡らせる。……もう人質に使えそうなヤツはいない。武力行使で突っ込んで行っても、このバカ強い2人に勝てるとはとても思えない……

「……チィッ!!」

原田は苦汁をなめたような表情で舌打ちをすると1人で逃げて行った。翔に倒された2人は完全に伸びてしまっていた。

「……大丈夫ですか？傷だらけですけど……」

「え？あぁ。まぁ、なんとか……」

伸びていた2人が目を覚まし、原田の逃げた方へ慌てて走って行った後、青年は翔に話しかけた。彼の目に先ほどまでの迫力はなく、優しさのこもった目だった。翔は所々赤く腫れ上がって顔は数ヶ所切れていた。

「僕は氷室彰（ひむろあきら）と言います。２５歳、科学者をやっています」

「科学者…ですか…。……あっ、オレは笹原翔って言います。２０歳で……フリーターです」

２人は互いに自己紹介をした。翔はフリーターと言う事が少し恥ずかしかったが、彰が何も言及せず、「よろしくお願いします」と笑顔で言ってくれたのをありがたく思った。そして翔は彰に質問をした。

「あの……、どうして助けてくれたんですか？」

「うーん……、ひとつはキミが大勢でボコられていた事。もうひと

つは、彼がナイフを彼女に突き付けていた事でしょうかね。女の子を人質に捕るのは許せませんでしたし……」

彰は横にいる女子高生を指し示しながら答えた。少女はまだ震えてはいるものの、だいぶ落ち着いてきてはいるようだ。

「君、名前は？」

「……篠原…亜美です……」

篠原亜美（しのはらあみ）は翔の問いに静かに答える。彰が、彼女の連れはいないのか、と辺りを見回していると、

「あっ、いたいた！！亜美ぃ～！！！」

「……愛理ちゃん！！」

遠くから亜美を呼ぶ声が聞こえ、亜美もその声に応える。愛理という彼女も亜美と同じ制服を着ていた。

「この子のお友達の方ですか？」

「うわっ、イケメン！！……亜美、あんたもしかしてこんなイケメンにナンパされてたの！？……うわぁ、いいなぁ～。もっと早く亜美見つければ良かったなぁ～、あぁ～あぁ～……」

彰を見た愛理は1人で興奮してしまっている。彰と翔が対応に困っていると、亜美がそんな彼女を現実に引き戻す。

「愛理ちゃん……。この人達はね、私が変な人達に絡まれているの

を助けてくれたんだよ？」

「え？そうなの！？亜美、大丈夫だった？怪我してない？」

「大丈夫ですよ。彼女に怪我はありませんでした」

愛理が心配そうな顔で亜美に問い詰めるのを見て、彰が代わりに答えた。

「良かったぁ……。ホントにありがとうございました。アタシは西宮愛理（しみやえり）です。亜美ったらひどい方向音痴で、アタシがついてないと、すぐにどっか行っちゃうんですよ～」

「そうだったんですか…。亜美サン、次は気を付けて下さいね」

「はい、ありがとうございました。それじゃあさよなら」

彰が2人が仲良く帰って行くのを見送った後、翔と話の続きをしようと視線を変えた。そこには……、

「もうっ、翔ちゃんのバカ、バカ、ばぁかぁ～（怒）！！！あたしは警察呼ぼうって言おうとしたんだよ！？なんで考え無しに突っ込んで行っちゃうの！？信じらんないよぉ！！！」

「いやぁ、気が付いたら殴ってて……って痛っ！！なんで鈴奈が殴っ……痛いから！……仕方がなかったん…痛いって！ごめ……痛いっ！！……ご、ごめんなさい！！！」

彰がさっき話しかけた女性、鈴奈に翔がポカポカと（グーで）殴られ、怒鳴られていた。そんな光景を、彰はただ苦笑いしながら見ているしかなかった……。

所変わって、翔達のいる場所からかなり離れた路地裏にて……、

賑やかな通りから一本外れているだけなのに、光はほとんど入らず、薄暗く、湿っぽかった。原田はそこで息を切らし、座りこんでいた。

「……ハァ…ハァ…、ちくしょう、どいつもこいつも…つかえねえ野郎共だ……」

一緒にいた2人も翔にやられ、自分は彰にいとも簡単に亜美を奪い返された。正直に言うと、原田はそんな2人が怖くなって逃げ出したのだ。

「……ハァ…ハァ…俺はたった1人で頑張ってきたんだ……。親にも、友達にも、見捨てられて……、……それでも強くなったんだ……俺が最強だ……。俺より強い奴なんか…社会も…人も…、…何もかもいらねぇ！！！」

……1人になると、ついつい本音が出てしまう。でも、本当は違うんだ……。ホントは……俺は……

『力が欲しくはないか？』

突然、暗がりから声が聞こえてきた。低く、何かでフィルターが掛かったような声だった。

「！？……誰だよぉ……？……誰なんだよぉ…！？」

原田は暗がりに向かって叫んだ。だがその声は、恐怖でうわずっている。

暗がりから聞こえる声は、原田の問いかけには答えなかったが、更に自分の話を続けた。

『お前は、何もかもいらない、と言っていたな。つまり、全てを壊したい、という事でいいんだな？』

……壊す？全てを？何を言っているんだ、コイツは？そんな事したら……。……でも、そんな事が……そんな事が……

「……でっ、出来るのか？そんな事が……」

『お前が……それを強く望むのならな……』

曇った声の主は、ゆっくりと原田に近づいて行った……。

第1話．ＢＥＧＩＮＮＩＮＧ～科学者とフリーター～（後書き）

『ブレイヴ』第1話、如何だったでしょうか？自分ではいい感じに出来たんじゃないかと思ってます。感想お待ちしてます。さてさて、次回はやっとライダーが出せる予定です。後、まえがき&あとがきにちょっとした事をやろうかと思ってます。お楽しみに（＾Ｏ＾）ゞ！！

第2話．ＩＮＤＩＧＯ～骸骨と剣士～（前書き）

ども、みやびわたるです。┌（＾◇＾）┘

今回から、このまえがきのスペースに前回までのあらすじみたいなものを書いていきたいと思います。それではスタート！！！¢（・Д・）¢

前回までの「仮面ライダーブレイヴ」は……、

笹原翔「鈴奈、お前よく平気でいられるよなぁ……」

旭鈴奈「翔ちゃんが暑がり過ぎなの！！」

笹原翔「ぐっ、ガハッ！！」

篠原亜美「……誰か…助けて……」

原田俊也「へへへ、どいつもこいつも、俺に楯突くから悪ぃんだよ」

氷室彰「彼女、怖がってるじゃないですか」

そして忍び寄る謎の声……。

???『力が欲しいのか……？』

第2話．ＩＮＤＩＧＯ～骸骨と剣士～

彰と鈴奈は傷だらけ（半分くらいは鈴奈のパンチによるもの）の翔を、鈴奈達の家でもある喫茶店「サン・ライズ」に運びこんだ。そこは住宅街の中にあるレトロな外観の店で、店主・旭奈津子（あさひなつこ）が１人で切り盛りしている。

奈津子は鈴奈の母親の姉で、鈴奈が大学進学した時に「距離的にちょうどいい」という理由で住まわせており、翔が住む家がないと言った時も、「ついでに翔くんも住んじゃえば？」と言って部屋を貸してくれた人なのだ。近所でも、懐の広い姉御的な性格で知られている。

「うわぁ……、それにしても、翔くんスゴイ傷だね…。一体何があったんだい？」

奈津子はすぐに店を閉めた後、翔の傷の手当をしながら鈴奈に事情を聞いていた。

「翔ちゃんが不良に絡まれていた女の子を助けに行って、ちょっとやり過ぎちゃったの……」

「や、やり過ぎたって何だよ？追い討ちかけてきたのは鈴な〝がぼお…！？」

鈴奈は翔が余計な事を言わないように口を両手で塞ぐ。

「あ、それとね。この人が間に入って、女の子と翔ちゃんを助けてくれたんだよ？」

「んん～ん！！んん、んんん～ん～ん！！！（違うって！！オレも、その子を助けたんだよ！！！）」

鈴奈は彰を指して奈津子に紹介した。口を塞がれたままの翔が必死に訂正するが「ん」という単語にしか聞こえない。

「へぇ、そうだったの…。彰くんだっけ？今日はありがとね」

「いえ、鈴奈サンが助けに行こうとしていたので、流石に危ないかなぁと思いまして……」

「だったら尚更だよ。まったく……、あの2人は小さい頃から仲良かったんだけどね……。2人共、思ったら一直線な性格でさ。どっちかが怪我して帰って来るなんてしょっちゅうなんだよ」

彰が奈津子と話している間に、翔が鈴奈の拘束から脱出する。

「…このヤロ……ぶはぁっ！！……ハァ…ハァ……」

「あ、ごめん。苦しかった？」

「鈴奈！！なにも鼻まで塞ぐことないだろ！？死ぬかと思ったぞ！？」

「仕方がないじゃん！！さっきは翔ちゃんが……あれ、何でだっけ？」

「ハァ！？」

翔と鈴奈のやり取りをニコニコと見ていた彰は口を開いた。

「では、僕はそろそろ帰りますね」

「ん？もういいのかい？」

「はい。研究所で助手が待っているので……」

彰は入り口の所に行き、ドアを半分くらい開けた所で立ち止まり、

「あ、そうだ。翔クン、今度時間ができたら、僕の研究所に来てください。見せたい物もありますし。それじゃ、また」

と言うと、軽く会釈して店を出ていった。

「翔ちゃんに見せたい物って何なんだろうね？……って翔ちゃん、大丈夫！？」

翔は鈴奈と言い荒らそっていた時、押し飛ばされた拍子に机の角に顔をぶつけて鼻血を大量に流していた……。

「……い〝や……ダメ〝…かも〝……」

翔はそのまま仰向けに倒れて気絶してしまった。

「サン・ライズ」を出た彰は、ジーンズのポケットから針のついた計器を取りだし、しばらくそれを眺めてポツリと、

「反応が消えている。やはりあの時か……」

そう呟きと、計器をしまいながらスッと体の向きを変えて夜の住宅街を歩いて行った……。

それから数日が経った、その日は鈴奈は大学へ行っていて、そして翔は喫茶店で働いていた。今は奈津子が買い物に行っていた為、翔が1人で店番をしていた。

「いやぁ、しっかしお前の喧嘩っ早いとこは相変わらずだよなぁ」

「うっせぇよ…。それに今回は女の子をだなぁ……」

「いやいや、翔っちが喧嘩する理由っていったら大体が女の子絡みだったっしょ？」

翔の高校時代からの悪友、馬場隆治（ばばりゅうじ）がカウンターでコーヒーを飲みながら翔と話し込んでいた。

「そんなに女の子達にフラグ立つような事してたらさぁ、いつか鈴奈ちゃんに愛想尽かされちまうぜ？」

「は？鈴奈がどうかしたのかよ？」

隆治はニヤニヤしながらからかうが、翔は相変わらずの鈍感体質を

発揮する。

「（マジ？翔っち、まだ気付いてないのかよ……？）……いや、やっぱ何でもねぇや」翔の鈍感さに呆れと懐かしさを感じて、隆治は思わず話題を変える。

「そういえば最近聞いた話なんだけどな…。一応、翔っちの耳にも入れておこうと思うんだ」

「おっ、久しぶりの情報通が来たね？今回は何なんだ？」

隆治は高校時代、仲間内では情報屋で通っていた。その情報収集能力はかなりのレベルに達している。彼のおかげで、翔が退学を免れたという過去もある。

「この数日で、いくつかの建造物が相次いで倒壊してるんだ。被害はまだ小さいし、ほとんど夜に起こってるから、表沙汰にはなってないけど……。それも爆発とか交通事故とかじゃなくて、何かで切られたような跡なんだって。しかも全ての被害で共通してると来たもんだ」

「……偶然……じゃなさそうだな……」

店内には2人しかおらず、先程と打って変わって深刻な雰囲気になっていた。

「たぶんね…。それと、この話を翔っちに話しておこうと思ったのは理由があるんだ。この事件が最初に起きたのは、翔っちが喧嘩した所の近くなんだよ。なんか変わった物見たり聞いたりしてないかな？と思った訳よ……」

「…うーん…変わった物か……」

翔は右手人差し指を額に当てて考え始めた。……あの時、いつもと違っていた事……そんな非日常な事件が起きるようなきっかけ……

「……いや、特に思い当たる事はないかなぁ」

「……そっか、わかった。じゃあ何か見つけたら、互いに連絡し合うって事でよろしくな。あ、コーヒーうまかったぜ。店主さんに比べりゃまだまだだけど……」

「悪かったな、まだまだでよ！！」

翔が怒っているのを見て隆治はニッと笑い、コーヒー代をカウンターに置くと、「じゃあな」と言って店を出ていった。

「……一応、見ておくか……」

隆治がいなくなった後で翔は1人考え込んでいた。

時間は昼近くになり、「サン・ライズ」には奈津子が買い物から帰って来ていた。翔は昼休憩の時間を利用して、先程隆治が言っていた現場を観てまわっていた。

倒壊現場を数ヶ所廻った翔は一番最後に、3・4日前に自分が大立

回りを演じた場所に来ていた。

「……確か、此処の近くであったんだよな……」

辺りを見れば確かにいろいろな所に、切り傷のような跡があった。だが周囲の人々は気に留める様子もなく、とても此処が今まで見てきた倒壊現場と関連があるとは思えなかった。他の場所は規制線が貼ってあったり、瓦礫が散らばっていたりしていたのにだ……。

「一通り見てみたけど、やっぱ何もないなぁ。……そろそろ戻るかな」

翔は喫茶店に帰ろうと歩き出した。その時、

ズガアアァァン！！！
きゃあああ！！
グゥガアアアア！！

爆音、悲鳴、雄叫び。それらは翔の背後でほぼ同じタイミングで、日常に浸っていた繁華街の空気を震わせた。

「な、なんだ！？……ってうおっ！！なんなんだアイツは！？」

慌てて振り返った翔の２００メートルぐらい先には、黒の体に白いパーツを散りばめた人型の怪物がいた。その姿は人骨のほとんどを外に露出させたミイラのようで、左腕には亀の甲羅ように平たく、ゴツゴツとした盾をあり、右腕は人の手の代わりに長くギザギザした刃物が生えていた。

『グゥゥゥゥ……』

怪物は静かに唸りながら此方へ近づいて来た。翔は怪物の顔に視線を移す。頭蓋骨のような仮面の奥には殺気を帯びた赤く鋭い目がギラギラと妖しく光っている。翔はその目に吸い込まれてしまいそうな感覚に陥り、視線を逸らすのを忘れていた。

「……はっ！！」

翔がふと我に還り周りを見渡すと、人々が慌てて逃げ惑っていた。会社員も、子連れの母親も、互いを押し退け合いながら、我先にといわんばかりの形相で走って行く。無理もない。突然の非常事態に落ち着いて行動できる人は少ないだろう。……そうこうしている間にも怪物と翔の距離は縮まっていく。

「や、やばい…。逃げなきゃ、逃げなきゃ……」

翔が走り出そうと足を動かした瞬間、

『グオォォォォ！！！』

怪物が右腕を降り下ろすと、刃先から衝撃波が飛び出す。衝撃波は走る人々の前方にある外灯に当たり、大爆発を起こした。周りにいた翔達は四方八方に吹っ飛ばされる。

「ぐっ、うあぁぁ！！！」

翔はかなりの距離を飛ばされ、怪物とは2・3メートルしか離れて

いない場所まで転がった。

『グゥゥゥゥ……！！』

「く……くそっ！！」

翔はすぐに起き上がろうとするが、体の至るところを打っているため思うように動けない。怪物がゆっくりと近づき、右腕の刃物を高く構え、翔めがけて力強く降り下ろす。

「チクショウ……、こんな事で死ぬのかよ……」

翔は覚悟を決め、目を強く瞑った……。

翔はふと不思議に思った。タイミングではもう当たっているはずなのだが、まったく痛みを感じなかったのだ。死ぬ直前くらいは流石に痛いだろうと思っていた翔はゆっくりと目を開けた。

だが目の前にあったのは白い刃ではなく、コバルトブルーの物体だった。目を強く瞑っていたせいで視界がボヤけ、物体の姿をすぐに確認する事が出来なかったのだ。時間がたつにつれ徐々に視界が晴れていき、その全体を見る事が出来た。

そこにいたのは1人の剣士。しかし、姿が普通ではない。コバルトブルーのボディに白いラインが入っていて、ゴツゴツした藍色とライトブルーの鎧が肩、胸部、背中についている。顔はボディと同じくコバルトブルーで、顔面の中央を縦にまっすぐ黒のラインが走り、その左側には「Z」の字を菱形に崩したような目があった。それを鏡会わせにした形の目が反対側についていて、両目共にオレンジ色の光を放っていた。目の下からは2本の白いラインが出ていて体のラインに繋がっている。額には鎧と同じようなカラーリングの大きな角飾りがあり、そこからサーベルの刀身をイメージさせる角が4本、両目をそれぞれ2本ずつで覆うように下向きに伸びている。腰には藍色のバックルが中央にあるベルトが巻かれていて、彼の顔をイメージさせるロゴが刻み込まれていた。そして右手にはダークブルーと黒の剣が握られている。

翔はそれを、何処かの化学機関が作ったロボットだと思ってしまった。だがボディラインを見る限り、その剣士は成人男性の姿をしている。彼は手に持った剣で怪物の一撃を受け止めていた。黒の柄には白い「Z」を模した模様があり、鍔の部分は無骨な機械になっていて、そこから日本刀のような刀身が飛び出していた。

「……フッ！！…ハッ！！」

剣士は剣をおもいっきり振り抜き怪物の腕をはね除け、素早く攻撃の構えをとると、怪物の胸部に3・4発の突きを入れる。

『グガッ！！』

怪物は火花を散らしながら5m程吹き飛ばされた。何故生物のような姿の怪物が火花を出すのか翔は不思議に思ったが、今の状況では答えてくれる人がいないのと、全身に激痛が走るせいで、ヨロヨロと黙って立ち上がる事しか出来なかった。翔が立ち上がるのを見た

剣士は、左手で翔に「もっと離れるように」という仕草をした。

「え……、あ…はい」

翔が言われた通り剣士から距離をとる。剣士は剣の鍔にあるスロットから縦８センチくらいの青いメモリーカードを引き抜き、代わりに赤い同形のメモリーカードを取りだしてスロットに差し込んだ。

［バーナー……プレスキャン］

電子音が流れると、剣の周りを藍色のノイズが覆い、剣の形が変わっていく。

そしてそのノイズが晴れ、刀身は赤く巨大な両刃に変わった。

怪物はすでに起き上がっていて、そして右腕の刃の形状を巨大な斧に変化させていた。それを見た彼は鍔の上部にあるトリガーを剣の柄に向けてスライドさせる。

［バーナー……ファイナルスキャン］

再び電子音が流れて、刀身が高熱を帯び、白く発光し始めた。周りの空気が熱気で揺れている。剣士はゆっくりと切っ先を怪物に向け、怪物に向かって走り出す。怪物も大声を挙げながら剣士に突進してきた。

「はぁぁぁぁぁぁ！！！」

『グゥゥァァァァ！！！』

走り出したのはほぼ同時だった。しかし、攻撃では剣士の方が一瞬早く、怪物を高熱の剣で十字に切り裂く。

『……グゥゥゥゥォォォォォ！！』

怪物は火花と炎を纏い、断末魔の叫びを上げて爆散した。

剣士は一息ふうっと息をつくと、翔のいる方に向き直った。そしてスロットからカードを引き抜くと、ベルトの右腰にある斜めに入ったスリットに鍔の部分を押し込む。ちょうど刀を鞘に納めたような状態になった剣はピピッという音を鳴らしながら光とノイズに包まれていく。そのノイズは全身を包み込み、ノイズが消えるのと同時に青い装甲がなくなっていく。完全に装甲が消えると、そこには翔には見覚えのある青年がいた。

「……っ！？…彰さん！？」

黒髪の青年、氷室彰が先程の青い剣士のいた場所で真剣な眼差しをして立っていた。

第2話．ＩＮＤＩＧＯ～骸骨と剣士～（後書き）

彰「……えぇと、確か此処でよかったハズですけど……。にしても暗いですね。」

？？？「彰君、来たようだね……。」

彰「おや？この声は……。」

パァッ！！（※灯りがついた）

彰「うっ、まぶしい！！」（・Д＜）ゞ

みやび「どもども～！！！作者のみやびわたるで～す。」（¥◇¥）

彰「みやびクン、照明明るすぎですよ。ちょっと絞って下さい。」

みやび「いやぁ、初だから張り切りすぎちゃって……。ところで彰君、今回からこのあとがきのスペースでコーナーを始めるんだよ。」（※照明の明るさを絞る）

彰「そうでしたね。確か名前が……」

みやび「あぁ！！ストップ！！！ちゃんと掛け声があるんだよぉ。

ゴニョゴニョ……。」

彰「……あぁ、なるほど。それじゃあいきます。『彰と、』」

みやび「『みやびの、』」

彰・みやび「『あとがき、対ＢＡＮＧ！！！』」

みやび「さぁ、始まりました、『あとがき、対ＢＡＮＧ』。このコーナーでは、本編キャラをゲストとして呼んで、読者からの質問に答えてもらったり、どうでもいい雑談とかしようぜ、というざっくりした内容でお送りします。」

彰「ざっくりしすぎでしょ……。っていうか『対ＢＡＮＧ』ってどういう意味なんですか？」

みやび「元々『対バン』は複数のバンドが一緒にライブをするって意味なんだけど、今回のＭＣとゲストが語り合うっていうのに掛けてみました。英語にしたのは海苔です……。」イェーイ（≧ε≦）¥

彰「ノリの字が違いますよ？なんで海苔なんですか？もしかして食べたいんですか？パリッパリのを食べたいんですか？」

みやび「うおっ、いきなりツッコミの応酬がきた！！！」？（◎◇o）

彰「……なんか、ちゃんとしたツッコミ役が欲しいですね。僕とみやびクンじゃテンションに差ができます。それに疲れますし……。」

みやび「じゃあ、彰君の助手の人を連れてきてよ。あの人ならいいツッコミできると思うしね。」

彰「ちゃっかり次回予告になってるんですけど……。まぁ、わかりました。次回は連れてきます。」

みやび「よーし、決まりだな。おっと、そろそろお別れの時間だぁ。『あとがき、対ＢＡＮＧ』では、皆さんの感想をお待ちしてます！！！」

彰「いやいや、基本的には『ブレイヴ』の感想ですよ！？対バンはついでですから！！」？（◎Ｏ◎）

みやび「それではまた次回、お楽しみに～。」／（＞∀＜）／

第3話．ＮＥＧＡＴＩＡＲ～兵器とメモリー～（前書き）

えぇと、みやびわたるでございますゞ（≧≡ε≦≡）ゞ

更新する日をちゃんと決めてから、執筆に意外と余裕ができました（≡ε≡；）ゞ

なにせ学業との両立に、一番最初はてんてこ舞いでした……／（×Δ×）／

止まらないように踏ん張りまくる今日この頃です……。それでは第3話、スタート！！！C≡（・Д・）

前回までの『仮面ライダーブレイヴ』は……、

鈴奈「この人が助けてくれたんだよ？」

奈津子「彰君だっけ？今日はありがとね」

彰「翔クン、今度僕の研究所に来てください。見せたい物もありますし……」

ある日、翔達と出会った謎の青年、氷室彰。

隆治「この数日、いくつかの建造物が相次いで倒壊してるんだ。それも、何かで切られた跡なんだって」

怪物『グゥゥガアァァ！！！』

翔「チクショウ……、こんな事で死ぬのかよ……」

？？『……フッ！！……ハッ！！』

翔の目の前に突如現れたドクロの怪物と、青い剣士……！！

［バーナー……ファイナルスキャン］

？？『はぁぁぁぁぁぁ！！！』

怪物『グゥゥァァァァ！！！』

怪物を倒した剣士の正体は……、

翔「……っ！？…彰さん！？」

第3話．ＮＥＧＡＴＩＡＲ～兵器とメモリー～

とある場所に古い平屋がある。時代に取り残された化け屋敷のような外観は、何処か近寄り難いという雰囲気を醸し出していた。しかし巷では、「４・５年前からあの家に若い男女の幽霊が出る。白い服を来た２人の人影が出入りしている」などといった噂が出回っているという。

「まぁ、そういった噂が流れるのは仕方がありません。厳密に言うと不法侵入ですし」

「侵入……っていうか違法増築ですよね？これって……」

湿っぽく、所々にポツポツと照明がついている薄暗い通路を、氷室彰と笹原翔は足早に進んでいた。

「ハハハ、違法じゃありませんよ。此処はかつてある機関が合法的に造っていた秘密研究所です。僕はそれを“借りているだけ”です」

「だからってボロい平屋の地下をぶち抜かなくても……」

案外、幽霊とかの正体は意外な物だったりする。「化け屋敷の幽霊」の噂は、数年前から彰が平屋の地下にある研究所に住み始めた事が原因だったのだ。翔は驚きと呆れで、それ以上何も言う事が出来なかった。しかもそれ以前に聞きたい事もあった訳で……。

「……着きました。此処です」

目の前にあったのは、何処かの事務所の物を取って付けたような曇りガラスの扉だった。鍵はついておらず、研究所という事を考えると防犯面的に非常に無防備である。彰は「大丈夫です」とでも言うように何食わぬ顔でドアを開けて中に入って行った。

「（中もボロかったりして……）」

翔が不安がりながらドアをくぐると、そこは先程の湿っぽい通路からは想像もつかないほど広く清潔感溢れる空間で、ドラマなどでしか見ないような謎の機器がたくさん設置されていた。翔が「オレ、今日は驚きっぱなしだな」などと考えていると、

「ようこそ我が研究所へ。僕は此処で所長をやってるんですよ……といっても2人しかいないんですけどね。ハハハハ……」

彰はニコニコと満面の笑みを浮かべながら機器の説明を始めた。さながら目をキラキラさせて話す子供のようである。

「これは、高性能の地雷除去装置です。対人だろうと対戦車だろうと辺りの地雷を全て見つけ出し、特殊な破壊電波で使用不能にさせるんです。あとこれが携帯式の緊急用シェルター。一見するとただの分厚い鉄板ですけど、高熱を感じると一瞬で5メートル四方の核シェルターになります。耐熱温度は約５０００度。あとこれが……」

「あの～、彰さん？そろそろオレを質問……答えてくれませんか？」

翔は彰の説明を遮って、話を本題に戻すように促す。それを聞いて我にかえった彰は、申し訳なさそうに頭を掻いた。

「……すみません。つい夢中になっちゃって…。……さっきの怪物について……ですよね……。……わかりました。話します」そう言うと彰は急に真面目な顔になり、フゥッと息をついてから、再度口を開いた。

「あの怪物は“ネガティア”と呼ばれています。“センチメントメモリー”に内包された“フィーリウム”を物質化させたクリーチャーです」

「……え？ネガティア？……センチメント？フィーリ？なんですか？それって……」

翔はまったく聞いた事もない言葉の応酬に困惑してしまった。ネガティアは先程の骸骨の事だという事までは解った。しかしセンチメントメモリーだのフィーリウムだのと突然言われても、頭がまったくついてこれない。頭の上に「？」がたくさん浮かんでいる感じだ。

「……２０年前、奇妙な鉱物が発見されました。その鉱物は不思議な事に、周囲の生物が抱く感情に反応して形状や性質を変えるという力があったんです。科学者達はこの鉱物を“フィーリウム”と名付け、世界中の科学者が科学の進歩のためにこぞって研究を始めました。“感情に反応して形を変えるなら、それを意のままに操れればどうなるのか”ってね。」

「感情で形を変える……ですか……」

「はい。その研究は見事成功し、“世界中の様々な情報を感情だけで物質化する技術”ができたんです。すぐさま実用化に向けて開発が進んでいきました。が、やがてそれを“兵器”として使おうとしたグループが現れました。そういった思想の拡大を防ぐために世界で行われていた研究のほとんどがストップされました。そして今から１０年前、そのグループが再び研究を始めたという噂が研究者の間で流れたんです。」

彰はおもむろに懐から藍色のメモリーカードを取り出し、それを翔に見せた。

「これがセンチメントメモリー。先程話した技術を応用して、戦闘装甲を物質化させる物です。いずれ完成するであろう“兵器”に対抗するために作られたんですよ。」

「それってさっきの……って事はネガティアってその“兵器”の事なんですか？」

翔の問いに、彰は首を縦に振った。

「正確に言うとネガティアは、“兵器”を他の者が強奪して、更に改良した物です。“兵器”の技術を考案した科学者グループは、研究を再開して数年後に全員殺されたそうです…。そんな事もあって、今では科学者の世界でフィーリウムといえば、戦略的な道具としか扱われなくなってしまっています。最初は文化を進歩させる希望の光なんて呼ばれていたのに、“兵器”だなんて……」

そう言う彰は、やりきれないといった表情をしていた。フィーリウムを戦いに利用しようとした事も許しがたいが、それを利用するためだけに人の命を奪える者達はもっと許せないのだろう。

「……フィーリウムは、世間的にはあまり知られていません……。世界でも一部の人間しかその存在を知らない……。それが事態を更に悪化させてしまっているんです……。一般人に知識がない事を利用して、ネガティアという“兵器”で罪のない人達をたくさん傷つけている……！！作った動機なんて関係ない……僕は……ネガティアを作り出した人達を絶対に許さない！！この手で必ず見つけ出す！！！」

息を荒くする彰に先程までの余裕はなく、拳を側にあった机に叩きつけていた。歯をギッと食い縛り、全身から湯気が出るのではないかという程の圧気を放つ彰に、翔は圧倒されていた。そこまで怒りを露にするなんて、この人の過去に一体何があったのだろうか。翔はそう聞こうして、すぐに言葉を飲み込んだ。これ以上、赤の他人である自分が踏み込むべきじゃない、と……。しばらくの沈黙……。そして落ち着きを取り戻した彰が口を開いた。

「……はぁ……、すみません。熱くなってしまって……。とにかく……キミを此処に呼んだのは、キミにある提案をしたかったからなんです」

「提案？なんですか？」

「はい。……実はキミに……」

彰が何かを言いかけた時、突然、部屋中にサイレンが鳴り響いた。

彰は近くにあったマイクに駆け寄り、無線の向こうにいる誰かと話し始めた。

「優里チャンですね……はい……何処ですか？……榉実公園……わかりました。すぐに向かいます」マイクのスイッチを切った彰はサッと振り返り、翔の所まで走ってくる。

「翔クン、この話はまた後でお話しします。繁華街の時のネガティアがまた現れたみたいなので……。僕は現場に向かいますので、キミは此処で待ってて下さい」

「繁華街のヤツって、彰さんがやっつけたんじゃ……」

「いえ、本来ネガティアの完全態は、人間がフィーリウムでできた鎧を纏って生まれます。鎧をより強固な物にするため、作動してしばらくは鎧のみが独立して行動し、暴れまわって鎧の能力を高めていきます。そして鎧の強化が終わった所で人間に融合、完全態になるんです。鎧はただのエネルギー体なので、たとえ破壊しても再び何処かで復活してしまうんです。これを止める方法は、所有者の持っているネガティア用のメモリーを破壊する事、それだけなんですよ……」

鎧を破壊してもその存在が消える訳ではなく、更に強化された鎧と戦う事になる。つまり、一体のネガティアを倒すのに、運が悪ければ何回も戦わなければならないのだ。あまりに現実離れした彰の言葉を、翔は何とか理解する。実際にこの目で見ている事もあって、さっきよりは飲み込みが早かった。

「とにかく、翔クンは一度ヤツに顔を見られてます。申し訳ありませんが、僕が戻って来るまで此処で待機してて下さい。いいですね

！！」

「あ、ちょ…ちょっと……」

翔の返事を聞く間もなく、彰は猛スピードで部屋を出ていってしまい、気がつけば翔だけがポツンと取り残されていた……。

研究所を飛び出し、公園にダッシュで向かっていた彰はふと考えていた。翔に提案しようとしていた内容は、本来の彰自身の考えとは正反対の物だった。本当ならそんな事はしたくない。だが最近は、そんな我が儘を言っていられる状況ではなくなってしまっているのも事実……。

「……あぁ、ダメだ！！今はネガティアに集中しなければ……！！！」

樫実公園は大きな噴水があり、近所の住民にとって憩いの場になっている。そんな場所で暴れられれば、大惨事になりかねない。それだけは阻止しなければならない……。そして彰が公園についた時には既に怒号が響き渡っていた。

「グゴオォァアア！！！」

骸骨を身に纏ったような怪物、ネガティアは辺り構わず暴れまわっ

ていた。幸いにも人はいないようだ。彰は持っていたダークブルーの剣をかざして、ネガティアに向かって叫ぶ。

「破壊のフィーリウム、“スケルトン・ネガティア”！！アナタの鎧、破壊します！！！」

彰は剣を右腰に当てがった。すると機械から帯が飛び出し、腰を一周して鍔の部分にカチャリとはまる。そして藍色のセンチメントメモリーを取り出して鍔の側面のスロットに差し込んだ。

［ゼントル……スタンバイ］

電子音に続いて剣からは、ブウゥン、ブウゥンというバイクを吹かしたような音が鳴り始め、徐々にそのテンポを上げていく。音がブンブンブンというテンポにまでなった所で、彰は右手で剣の柄を握りしめ、再び叫んだ。

「……変身！！」

［ゼントル……セットアップ］

ベルトから剣を勢いよく引き抜き、頭の上に高々と掲げた。電子音が流れ、引き抜いた時に発生した青白い光が彰の体全体を包み込んでいく。そして包み込んでいた光が弾け消えた時、彰はその姿を変えていた。コバルトと白のボディ、ダークブルーのアーマー、顔面を覆い隠すような角飾り。そして「Z」を模したオレンジ色に光る複眼と逆手で持ったダークブルーの片刃剣……。

「“カラードライダーギア・ゼントル”。完全態になんかさせはしない。必ずアナタを破壊します！！！」

ゼントルは片刃剣、“ゼントルドライバー”を素早く順手に持ち変え、スケルトン・ネガティアに突進して行く。スケルトン・ネガティアも右腕を大きなサーベルに変え、ゼントルの攻撃を迎え撃った。そしてそんな光景を、影からじっと眺める者がいた。

「いいじゃねぇか……面白ぇ…面白ぇよ……。さて……そろそろいくかな……」

第3話．ＮＥＧＡＴＩＡＲ～兵器とメモリー～（後書き）

彰「……」

みやび「ん？」

彰「……」

みやび「彰君？どうしたの？黙りこくっちゃって……」

彰「みやびクン、……どうしてボクの助手の子が来てないんですか？僕はちゃんと呼んだハズですけど……」

みやび「あ……それは……その…、用事が…出来た……らしくて……」※段々声が小さくなる

彰「まさか……話の流れとかの理由で今回の話に出せなかったから、わざとあとがきにも出さないんじゃ……」

みやび「う゛゛……（完全図星）。……そ…それでは始めるとしようか！！『みやびと、』！！」（、∇、；）

彰「くっ……。話を反らされた…。まぁいいか、『彰の、』」

彰＆みやび「『あとがき対ＢＡＮＧ』！！！」

みやび「さぁ、今回の本編では新しい用語が出てきたね？」

彰「ですね。なので今回の対ＢＡＮＧはその用語解説をしたいと思います」

みやび「今回は“センチメントメモリー”と“フィーリウム”についてです。今のところ、彰君が変身するための青いメモリーと、炎を出す赤いメモリーの２枚が登場してるね」

彰「本編でも語られていたように、生物の感情を吸収して形状や性質を変える“フィーリウム”という鉱物でできています。内包された情報を引き出して、それに準ずる姿に変える事が出来る、近未来物質です。“ネガティア”も同じ要領でできているんですよ。ネガティアの場合は、フィーリウムが情報に準じた形に変化した動く鎧になるんです。そこに人間が融合されて“ネガティア・完全態”に変化し」

みやび「あー、要は仮面ライダー特有の、敵同士で同じツールを使うってパターンだね」キラン（◇ε◇）

彰「そこ！作者だからってメタ発言はしないで下さい！！あと話被せないで！！」？（。◇。；）

みやび「いやぁ、彰君の話長いからさぁ～。尺の関係でね……」

彰「随分変な所でカットしましたね……」ブー（０ε０）

彰「ところで、前回で登場した剣士（彰）の名前、ついに出てきましたね。“カラードギア・ゼントル”。表記は“ゼントル”ってなってましたけど……」

みやび「まだスペックは語れないけど、近々キャラ紹介の回を書くつもりだよ。タイトルに書いてある“仮面ライダーブレイヴ”ももうすぐ出てくるしね。」

彰「次回は助手の子は出てくるんですよね？」ギラッ（θДε）

みやび「う、視線が殺気を帯びている…。だ、出しますよ。…それではまた次回～」ヒヤヒヤ（＾Д＾；）

第４話．ＢＲＡＶＥ～疾風と適合者～（前書き）

えぇと、みやびわたるです。┐（￣＿￣；┐）

まず更新が遅れてしまった事にお詫びを申し上げます。どうもすみませんでした。

話の流れ上、文字数を制限する事ができずに１００００字近くになってしまいました。いつもで言うと約２話分……。長いよ……。

詳しくは、あとがきの方でもお伝えするつもりなので、よろしくお願いします。

それではスタート！！！

前回までの『仮面ライダーブレイヴ』は……、

彰「僕は此処の研究所で所長をやってるんですよ……」

翔「そろそろオレの質問……答えてくれませんか？」

彰の研究所に案内される翔……。

彰「あの怪物は“ネガティア”と呼ばれています。“センチメントメモリー”に内包された“フィーリウム”が物質化したクリーチャーです」

翔は彰から、未知の脅威、“ネガティア”について聞かされる。

［ゼントル……セットアップ］

彰「“カラードライダーギア・ゼントル”。必ずアナタを破壊します！！！」

第４話．ＢＲＡＶＥ～疾風と適合者～

樫実公園。樫の樹や大きな噴水がトレードマークのこの公園は、この時間なら親子連れがたくさんいて、小さい子供の声が響き渡っている。はずなのだが、この日はそんな音はなかった。代わりに聞こえるのは、ふたつの硬い物が激しくぶつかる音とけたたましい叫び声……。

「はぁぁああ！！！」

ダークブルーの鎧を身に纏った剣士、氷室彰ことゼントルは勢いよく走りだし、手に持った剣型武器、ゼントルドライバーで前方にいる白と黒の“異形”にダメージを与えていく。その戦い方は剣道、フェンシングなどが混ざったような変則的な動きで、相手にまったく先を読ませていない。異形、スケルトン・ネガティアは身体を激しくスパークさせながら後方に吹き飛ばされた。

『グゥゥゥゥ……』

スケルトンが唸りをあげながらもがいているのを見ていたゼントルは、腰のベルトの左側についている３つの細長いスロットの内のひとつに、新たに取り出したシルバーのメモリーカードを差し込んだ。

［ソニック……プレスキャン］

スロットから電子音が流れ、そこから発生したシルバーの電流が全身に伝わっていく。

「……さぁ、音速の世界へようこそ。……フッ！！」

スケルトンが起き上がって声がした方を確認した時には、そこにゼントルはいなかった。
『グゥ！？』
辺りを見ても姿を見る事はできず、至るところで土煙が上がっているという事がスケルトンに焦燥感を与えていく……。
「……そろそろ行きますよ？」
『グゥゥ…！？ガッ、グゴッ！グゥッ！！』
急にゼントルの声が聞こえ、スケルトンが反応しようとした時、刹那、四方八方から青い斬撃が切りかかってきた。スケルトンは突然の出来事に対処が遅れ、ほぼ全ての攻撃を食らってしまった。スケルトンは再び倒れ込み、先程まで見えなかったゼントルが姿を現した。身体の周りにはわずかに残像が漂っている。
「（……やはり、前回より鎧が硬くなっている…。この分だとメモリーの所有者が現れるのは時間の問題だな……。）ところで……アナタの所有者は……誰なんですか？」
スケルトンが黙っていると、ゼントルは更に2枚のセンチメントメモリーを取りだし、スケルトンゼントルドライバーの切っ先を向けて呟く。
「まぁ、喋る訳ないですよね……」
［エッジ……プレスキャン］

そしてドライバーに差し込まれているメモリーを抜き、手に持っていた白いメモリーを挿入した。ドライバーが電子音を流しながら刀身は白く変色したのを確認したゼントルは、腰のスロットからメモリーを抜き、残ったセンチメントメモリーを代わりに挿入した。

［レッグ……プレスキャン］

ゼントルは膝を曲げ、大きく勢いをつけて跳び上がった。それを見たスケルトンは右腕を鎖のついた十字のブーメランに変化させ、空中にいるゼントル目掛けてぶん投げる。

「フンッ！！！」

しかし、ゼントルが横一線にそれを真っ二つに切り裂いてしまった。ブーメランは綺麗な断面を露にしながら粉々に砕けた。ゼントルはそのままスケルトンを攻撃しようとドライバーを頭上で構える。一瞬、スケルトンがニヤリとしたような気がしたが、気のせいだと考えて思いっきりドライバーを降り降ろした。だが、その一撃はスケルトンには届かなかった。

「……ぐ……そん…な……！？」

スケルトンの全身に配された骨格が長い棘状に変化し、ドライバーを振り抜こうとするゼントルに深々と突き刺さっていたのだ。ゼントルは激しく火花を散らしながらも、棘から逃れるように後ろに跳んでスケルトンと距離を取る。全身をスパークさせているゼントルは膝をつき、息を切らしながら今しがた起きた事を分析しようと試みる。

「バカな……、その技は完全態にならないと使えないハズ……。一

体どうやって……まさか…」

『ごちゃごちゃうるせぇなぁ、青いのぉ！！』

「！？」

ゼントルの思考は完全に停止してしまった。何故ならその声は、たった今自分が考えていた疑問をいとも簡単に肯定してしまうからだ……。ネガティアが完全態になるには、使用者と鎧が直に融合しなければならない。そして融合すれば、ネガティアの人格は所有者側に移り、人間の言葉を喋るようになる。それを踏まえてもう一度考え、答えを導き出す……。“もうすでにスケルトン・ネガティアは完全態になっている”、と。

「一体いつの間に……」

『あぁ？そうだなぁ…。お前がブーメラン粉々にした時、かなぁ？』

その言葉でゼントルは即座に理解した。先程まで丸腰に攻撃を受けていたのは自分を油断させるための布石。わざと脆いブーメランを砕かせて視界を塞ぎ、影に隠れていた所有者と融合していたのだ。ネガティアは所有者と意思を共有する。そのため、アイコンタクトなしで連携を取る事もできる。今回はその特徴を上手く突かれた結果となってしまった。しゃがみ込んでいたゼントルは急いで立ち上がって攻撃に移ろうとしたが全身を痛みが走って上手く動けない。

「うっ……くそっ！！」

『あ～、あんま動かない方がいいと思うぜぇ。不意打ちとはいえ、

骨の槍が突き刺さったんだ。血は出てなくても、激痛でフラフラなんじゃねぇの？』

メモリーには、鎧の核となる“センチメント”以外に内包された情報を使用者に付加する“センチエイド”というタイプがある。ゼントルが使った“レッグ”や“ソニック”のメモリーはそのセンチエイドに当たり、彼は“レッグ”で強化した脚力で高く跳び上がり、その勢いを使って攻撃しようとしていた。しかし、スケルトンはそのスピードをカウンター攻撃で逆に相手へのダメージに利用した。これができるネガティアはなかなかいないとゼントルは推察している。今まで戦ってきたネガティア達はただ暴れるだけというタイプが多かった。そのため、彼の心にはほんの少し“慢心”が生まれてしまっていたのだ。大ダメージを食らった今のゼントルでは立つ事も難しく、意識を保つだけでやっとの状態だ。

「（戦闘に慣れて隙を見せるとは、僕も墜ちたものだ。しかし、久々に厄介な相手だな……。しかも思うように動けないとなると……それなら……）」

ゼントルは震える手で腰のスロットから2枚のメモリーを抜き、別のメモリーを差し込んだ。

［ライト……プレスキャン］

ゼントルの身体を銀色の電流が流れる。すると次第に荒かった彼の呼吸が整っていき、最終的には先程までの痛みなどまるでなかったようにスッと立ち上がってしまったのだ。それを見たスケルトンは驚きの色を隠せなかった。

『はぁあ！？何なんだそれは！！！さっきまでのは猿芝居だったっ

てのかよ！？』

「いいえ、先程のはホントに痛かったです。今使った“ライト”のメモリーは、“物体にかかる負荷を限界まで減らす”効果があります。それを利用して、一種の麻酔に使わせてもらいました。ホントの麻酔ではありませんし、気休めなんですけどね」

ゼントルは、“ライト”を使用している時だけしか痛みを緩和する事ができない。しかもメモリーを使用する事自体が身体に負担をかけるため、今の状況で他のメモリーを併用するのは厳しい。要するに“ライト”を此処で使うという事は、ある意味で“悪あがき”に近い行為なのだ。

『……はぁ……なるほどな。お前、俺にマジで破壊されてぇみたいだなぁ、えぇ！！？』

不敵に話すゼントルに、スケルトンの怒号が飛んだ。どうやら本気で怒らせてしまったようだ。

「（……“あの事”は優里チャンにはかなり前から話してあるし、彼が来るまで時間を稼ぐとするか……）」

叫びながら走ってくるスケルトンを、ゼントルはドライバーをゆっくりと構えて迎え撃った。

時は遡り、此処は彰が所長を務める研究所。彰に待機するように言われていた笹原翔は１人困惑していた。その原因は自分を見ている少女にあった。

「ふーん。さすが所長が選んだ“適合者”、見込みはありそうだねっ……フムフム……」

「……あのさ。あんまりジロジロ見るのやめてくれない？」

翔の目の前に、１８歳くらいの少女が立っていた。赤毛でパーマのかかったショートヘア、ぱっちりした黒い瞳、科学者が着るような白衣は着ているが外見は完全に今どきのギャルだ。翔は椅子に座らされ、彼女はその周りをグルグルと回りながら持っていた紙に何かをメモしている。

「いいじゃーん。久しぶりに“適合者”が見つかったんだよ？ウチだって見てみたいんだもん！！」

「見たいんだもんって……（何だこの子は……。つっこむ所多すぎ！！）、っていうか君誰なの？あとさっきから“適合者”って言ってるけど、それ何なんだよ？」

それを聞いた少女は深いため息をついて、紙とペンを近くのテーブルにバンッと置いた。

「うるさいわねぇ！！質問羅列すればいいってもんじゃないのよ！！ウチの名前は小山優里（こやまゆり）！！！此処の副所長よ！！“適合者”ってのはあなたの事！！“ブレイヴ”を扱える装着者の事なの！！！ハイッ、質問コーナー終わりっ！！！」

「んなっ！？（何だこの唯我独尊マシンガンボム娘は！？無茶っぷりは鈴奈以上かよ……！！かわいい顔して中身が悪魔なのはそっくりだけど……）……あれ？」

翔は優里へのムカつきで顔をひきつらせていたが、ふと優里の言った言葉が引っかかった。

「今、“ブレイヴ”の装着者って言わなかった？」

すると優里の目がキランと光った（ように翔には見えた）。ニヤリと笑う優里に、翔は冷や汗をかく。

「えぇ、そうよ。彰所長があなたを此処に呼んだ理由、今から教えちゃうから……覚悟しなさいよっ？」

「お…おう」

優里の人差し指を向けられ、翔は何を言われるのか頭の中でいろいろ模索してみた。だが優里の口から出た言葉は、そのどれにも当てはまらなかった。

「所長があなたを助ける時、変身してたでしょ？あなたにはそれと同じ事をやってもらいますっ」

「へぇ～……え？」

そして時は戻り、樫実公園。“ライト”のメモリーの効果で一時的に痛みを和らげたゼントルは、完全態となったスケルトン・ネガティアの攻撃を間一髪でかわしたり、牽制をかけて距離をとったりといった動作を何度も繰り返していた。

『おいおい青いのぉ！！！さっきからちょこまかとウゼェなぁ！！！』

「なっ……くそっ！！」

しびれを切らしたスケルトンは右腕をかなり長い西洋剣に変形させ、距離の離れたゼントル目掛けて降り回す。ゼントルはバックステップでなんとかかわすが、その呼吸は明らかに荒くなっている。

『おらおらおらぁ！！！』

「ぐがっ、うっ！！うぐっ！！！」

そんなゼントルの変化に気づいたのか、スケルトンは更に猛攻を仕掛ける。足がもつれたゼントルは反応する事ができず、ほとんどの攻撃を受けてしまい、その場に倒れ込んでしまった。

『へへへ……、どうやら“ライト”ってヤツの麻酔も効かなくなっちまったみたいだなぁ？そろそろ俺に破壊されちまえよ……』

不気味な笑い声を挙げながらゆっくりと近づくスケルトンは大鎌に変化させた右腕を高々と掲げた。そこから思いっきり降り下ろすという事が一目で分かる。今のゼントルには避けられないと踏んでいるのだろう。

「くっ……、どうしてネガティアなんかになったんですか、原田俊也！！！」

『あ？よく分かったな、俺の正体が……』

「ネガティアは……特殊な電磁波を放っています。その電磁波を追っていけば、所有者の居所なんて……簡単に分かりますよ……」

『そうかい……。理由ねぇ、簡単だよ。全てを破壊するためさ……』

ゼェゼェと息荒げるゼントルに、スケルトンは静かにクククと笑って話を続けた。

『どいつもこいつも、俺を除け者にしやがったんだよ。友達も、家族までも、俺を見捨てやがった……。高校で荒れててよぉ、大学受験に失敗してよぉ、親は俺を“恥さらし”とか言って追い出したんだ！！なんとか働こうとしたんだ……。でも、不良なんか相手にする所なんてなかったんだよ…。もう、絶望だよ……。そして俺は決めたんだ。俺を除け者扱いしたヤツ、ムカつくヤツ、全てを破壊するってなぁ！！……ククク、お前もだ……青いのぉ。ことごとく邪魔しやがって……ハカイしてやる……ハカイシテヤル』

静かに近づいてくるスケルトンは、明らかに正気を失っている。狂った笑い声を挙げながら、ゼントルのすぐ目の前にやって来る。

「くそっ、ここまでか……。……」

『さっさと壊れちまえよ……青いのぉ！！！』

ゼントルが最後に何かを呟いたが、スケルトンの言葉が被さって上手く聞こえなかった。

そしてスケルトンの大鎌が勢いよく降り下ろされ、ゼントルを縦に両断し、火花と血しぶきが辺り一面に飛び散った。

ハズだった。

『あん？何しに来た、“スーツ野郎”』

ゼントルの目の前には、ゴツゴツした短剣でスケルトンの大鎌を受け止めている……笹原翔がいた。

「くっ……、うぅぅぅぁぁあああ！！！」

翔は短剣を力いっぱい押し上げ、スケルトンを後方に押し戻す。そしてゆっくりと振り返ってゼントルを見て口を開いた。

「大丈夫ですか、傷だらけですけど……」

振り返った翔の姿に、ゼントルは驚愕する。手に持った短剣、そして腰に巻かれた銀と緑のベルト……。

「それは……、“ガンズブレイバー”と“ブレイヴドライバー”……。翔クン、まさか承諾したんですか？」

「話は赤毛ちゃんから聞きました。彰さん……どうして早く言ってくれなかったんですかぁ！？」

「！？」

翔の大声にその場の空気が一瞬静まり返る。ゼントルにとっては、

まさか翔が起こりだすとは思わなかったからだ。翔はそのままゼントルにつかみかかり、ゼントルに怒鳴り散らす。

「なんでオレを待機させて、自分だけ背負い込んでボロボロになってるんですか！？なんでもっと早くオレに“ブレイヴ”について相談してくれなかったんですか！？オレを見くびるなぁ！！！！」

ゼントルはその言葉を聞いて、初めて翔の怒っている理由が分かった。今までゼントル、彰の中には誰かを戦いに巻き込みたくないという感情があったのだ。

自分1人で戦えば、最低限他の誰かが傷つくのを防ぐ事ができる。たとえ孤独になっても皆を護るために戦う、自分が初めて変身した時に誓った言葉だ。翔を研究所に待機させたのもその誓いに従った結果だ。……それがどうだ。目の前にいる青年は、自分を頼れと言っている。手助けさせてくれと言ってくる人はたくさんいた。だがこの青年は自分に戦わせてくれと言っている。こんな事は一度もなかった。

「……もう僕は、1人で戦わなくていいんですか？」

自然に出た言葉だった。それは彰が、心の中にずっと押し込んできた……本音……。それを聞いた翔に先程の怒った表情はなく、ニッと笑っていた。

「当たり前っすよ！！」

翔はそのままスケルトンの方向に向きを変え、緑色のメモリーを取り出した。

「赤毛ちゃんに言われたんです。“所長を救えるのはあなただけだ”って……。早速救わせてもらいます！！！」

［エレメント……スタンバイ］

翔はベルトのバックルの左側についているレバーを引き出した。そして右側のスロットに左手でメモリーを挿入して、そのまま左手を顔の右側に持っていく。するとバックルからバイクのエンジン音が流れ、バックルは緑色に発光し始めた。翔は右手で引き出されたレバーを掴み、再び彰の方を見る。

「彰さんはそこで見ていて下さい。コイツはオレがやります」

ゼントルは既に変身を解除していて、翔をじっと見据えて頷いた。

「頼みましたよ……」

静かな彰の声に翔は小さく頷き、スケルトンの方に向き直る。

「変……身！！！」

翔は大声で叫び、右手でレバーをバックルに押し込んだ。

［ブレイヴ……セットアップ］

電子音と共にバックルから緑の光が迸り、翔の身体を包み込んでいく。全身を光が包み込んだ時、光が勢いよく飛び散り、緑とダークグリーンの戦士の姿を露にした。

緑色のボディ、ダークグリーンのアーマーを肩、胸部、背中に配し、すねと手にはシルバーのプロテクターがついている。頭部にはアー

マーと同じ色の角飾りがあり、その中央で小さなポインターがエメラルドに光っている。顔面の中央を縦に銀色のラインが走り、その両側を赤い複眼が輝いている。そして銀と緑のバックルの右側にはメモリーカードを挿入できそうなスロットがあり、左側には「T」の形をした黒いレバーがついている。右腰にはゼントルと同じような黒いスロットが3本装着されていて、先程まで手に持っていた短剣、“ガンズブレイバー”は左腰にマウントされている。

『お前も変身すんのかよ……。一体何モンだ、スーツ野郎ぉ！！！』

スケルトンの問いに、戦士は静かに答えた。

「“カラードライダーギア・ブレイヴ”だ……。さぁ、いくぜ！！！」

ブレイヴはそう言うなり、勢いよくスケルトンに向かって走り出した。

『へっ！！策も無しに突っ込んで来るのか！！とんだ馬鹿野郎だぁ！！！』

スケルトンは右腕を先程の西洋剣に変え、ブレイヴを何度も突き刺そうとする。しかし、どんなに剣を突きだそうと一向に攻撃は当たらない。スケルトンは焦りだす。時間が経つ毎に、ブレイヴのスピードが段々上がっているのだ。

『くそっ、くそっ！！なんで当たらねぇんだ！！！』

ゼントルが使った“ソニック”のメモリーを使っている訳ではない。ブレイヴは全ての突きを確実にかわす。高速で動くブレイヴは着実

にスケルトンに近づいていく。

「これはオレがタコ殴りされた分だ……」

そして一瞬でスケルトンの目の前まで近づき、顔面に渾身の右ストレートをぶちこみ、スケルトンを5メートル程転がす。

『ぶごぉ！！……ゲホッゲホッ、何だこいつ……めちゃめちゃ速ぇ……グホッ！！』

ブレイヴは間髪入れずにスケルトンに連続蹴りを入れた。ダメージを受ける度に、スケルトンの身体中からは火花が散る。

「この“エレメント”のメモリーにはな、“疾風の力”が内包されてるんだ。お前のドロドロの根性を吹き飛ばすにはちょうどいいだろ？」

『ハァ、ハァ……ドロドロだぁ？……あぁ、ウゼェ……。お前みたいな自己満足野郎見てるとな、めちゃくちゃムカつくんだよぉ！！！』

スケルトンは叫びながら全身の骨を棘に変化させ、ブレイヴに大量に発射した。これにはブレイヴも避けきれず、吹き飛ばされてしまう。それでも、ブレイヴは立ち上がり様、唸るように呟いた。

「自己満足だと？」

『あぁ、そうだ！！！自己満足野郎だ！！自分は不良をぶっ飛ばせてさぞかしご満悦だろうがなぁ、俺達みたいなはぐれ者の事なんか何も考えてねぇじゃねぇか！？チャラ男がナンパしても警察に捕ま

る訳じゃねぇ。なのに俺達がナンパしたら、お前らみてぇなヤツとケンカになって警察沙汰だ！！何だ、この不平等はよぉ！？』
スケルトンが自らの胸の内をぶつけていたが、ブレイヴ自身には届いていなかった。しかもブレイヴは、スケルトンに今まで以上の怒りを感じて拳を強く握りしめていた。

『どうも社会ってのは、俺達みたいなヤツらを毛嫌いしてるみてぇだしな。今俺がやってんのは単なる破壊じゃない、この世の全てへの復讐なのさ。ハハハハハ……！！！』

「変わらねぇよ……」

『なんだと？』

ブレイヴは一言だけ、呟くように言葉を放ちながら立ち上がった。どこか迫力の籠った言い方にスケルトンは思わず黙りこくる。

「復讐だろうが、破壊だろうが、やってる事は何も変わらねぇよ……。お前ひとりの都合で、一体何人もの関係ない人達が巻き込まれたと思ってんだ……お前なんかに……自己満足だの何だの言われる筋合いはこれっぽっちもねぇよ！！！」

ブレイヴがバックルのレバーを引くと、レバーの先に取り付けられたプレートも一緒に引き出された。シルバーの電子回路のようなプレートの中央には先程バックルに挿入した“エレメント”のメモリーがはまっていて、緑色の光を放っていた。

「次はお前に傷つけられた人達、全員の分だ…。さっきのパンチの１００倍重てぇぞ！？」

そう叫んだブレイヴは右手でレバーを勢いよく押し戻した。するとバックルから電子音が流れ、緑色のノイズが発生した。

［エレメント……ファイナルスキャン］

発生したノイズはブレイヴの両足に移動し、つむじ風のように高速で旋回し始め、終いには回転のスピードで足の形が見えなくなった。膝をかなり曲げていたブレイヴはそのまま高く跳び上がり、空中で跳び蹴りの姿勢をとった。

『ふ、ふざけるなぁ！！俺の野望を邪魔するんじゃねぇ！！！』

スケルトンは叫び声を挙げながら右腕を巨大な盾に変化させ、ブレイヴの一撃を防ごうとする。一方のブレイヴは全身を大きく捻り、緑のノイズを纏った身体を高速回転させながらスケルトンに向かっていく。

「いっけぇ！！“ツイストサイクロンキック”！！！」

ブレイヴの両足がスケルトンの盾に直撃し、激しい火花を散らした。スケルトンは苦悶の声を漏らしながらも必死に防いでいたが踏ん張り虚しく、ブレイヴの回転キックがスケルトンの身体を貫通した。スケルトンの後方で、ブレイヴは片膝をついて無事に着地する。

『……ぶ……ガッ、ちっ……チクショウガァアアア！！！』

胸に大穴を開け、身体中をスパークさせたスケルトンは断末魔の叫びをあげながら爆発四散した。スケルトンのいた場所には、気絶した原田俊也が倒れていた。

「ハァ……終わったか……」

ブレイヴはバックルからメモリーを抜き、バックルを少し傾けてベルトから外した。すると身体中に銀色のノイズが走り、変身が解除された。しばらく黙ってバックルを見つめていた翔だが、急に顔を上げて彰の方へ身体の向きを変える。彰は近くの樫の木にもたれかかっていて、翔の視線に気づいてフッと笑いかける。彰の目には、初めて出会った時と同じような優しさが籠っている。

「堂々と戦っていましたね。お疲れさまでした」

翔は静かに頷き、口を開いた。

「彰さん、オレ……今、複雑な気分なんです……」

「原田俊也の事ですか？」

「……はい。なんか……鎧をキックで貫いた時に、ヤツの記憶っていうか、心の本音みたいなものが、頭をよぎったんです。“つながりが欲しい”って……。上手くは言えないけど、すごく寂しそうでした……」

そう言うと翔は、そのまま俯いてしまった。彰は小さく頷いて翔に話し始めた。

「ネガティアの鎧は、所有者の苦悩などの負の感情を外側に引き出し、善の感情を奥底に閉じ込めてしまうんです。恐らく鎧の内側を一瞬でも通過したために、原田の心の本音が見えたんでしょうね……」

しばらく沈黙が流れる。ブレイヴが起こした風の影響か、木の葉が激しく揺れる音だけが空間を支配している。

「翔クン、多分僕が何を言ってもキミの考えている答えは変わらないと思いますけど……。これから、どうするつもりですか？」

そして彰がその沈黙を破るように、翔に問いかける。翔は俯いたまま、静かに、しかしはっきりと答えた。

「……ネガティアになった人達は、実は被害者でもあるんですよね……。今なら、彰さんがあの時に言っていた事も分かる……。ネガティアなんていうくだらない物を作って奴らを絶対に許せない……。オレは……彰さんと一緒に戦います。襲われている人達も、襲っているネガティアも救うために……」

「一緒に……ですか。……キミらしいですね」

2人は互いにニッと笑い合った。風が、先程とは違って優しく吹いていた。

此処に、剣と疾風、2人のコンビが誕生した。そしてこの出来事が、物語を大きく動かすきっかけになるという事は言うまでもない……。

第４話．ＢＲＡＶＥ～疾風と適合者～（後書き）

みやび「……やっちまったよ……」

彰「やっちゃいましたね……。週一ペースでやると言ったすぐ後に、まさかの更新遅刻……」

みやび＆彰「ハァ……」※暗いオーラが漂う

優里「……ぁああ！！もうっ！！！何２人して落ち込んでるんでるのっ！？さっさとタイトルコール言ってよ！！“優里チャンパ～ンチ”！！！あっ、ちなみにウチの名前は小山優里。彰所長の助手です！！」※拳骨パンチ×２

彰「痛っ！？何故僕まで……。あ、そうですね……『彰と』」

みやび「『みやびと』イタタ……」

優里「『優里チャンのっ』！！」

彰＆みや＆優里「『あとがき対ＢＡＮＧ』！！！」

みやび「えぇと、まずは今回の更新がかなり遅れてしまった事に関して、……本当にすみませんでした！！」

彰「そもそも、どうして遅れちゃったんですか？」

みやび「うーんと、？筆のスピードが遅いという点、？作者が現実世界で試験ラッシュに遭っている点、？ぶっちゃけ週一ペースというのが学生の僕には合わないんじゃないかという点、っていうのが主な理由なんだけど、どれも言い訳だよね……」

優里「いけない！！作者さんが限りなくブルーになっちゃってる！！！」

彰「みやびクン、今は落ち込んでても仕方がありません。このスペースも字数制限があるので、理由とかはこの際省いて、これからどうするかを早めに言っておきましょうよ」

みやび「え、えぇと……。とりあえず、現在僕が考えている対策をお話しします。学業と執筆活動の両立をはかるため、週一ペースを取りやめ、“不定期更新”に切り替えようと思ってます。更新の曜日は“日曜日の１６時”で固定するつもりです。とりあえず、自分なりに今回の話で“ブレイヴ誕生編”が終わったという区切りになったので、ちょうどいいという事で、そういう運びとなりました。……あっ、決して１ヶ月も開けるような事はしないのでご安心下さい！！クオリティを更に高くした話をこれから提供いたしますので、今後とも『仮面ライダーブレイヴ』をよろしくお願いします！！！」深々ｍ（＿＿）ｍ

優里「それではまた次回っ！！」

彰＆みや＆優里「お楽しみに～！！！」／（＜＿＜）ｏ

あとがき対ＢＡＮＧ～番外編～（前書き）

はいっ、みやびわたるです。ゞ（＾◇＾）ﾚ

今回はあとがき対ＢＡＮＧの番外編をお送りします！！

それではスタート！！！

あとがき対ＢＡＮＧ～番外編～

みやび「ふひぃ～～！！」／（≧∇≦）／

彰「突然どうしたんですか、めちゃめちゃ清々しい顔してますけど……」

みやび「だってさぁ、最初の話が終わって、彰と翔が一緒に戦うって所まで行ったんだよ？」

彰「まぁ、そうですね」

みやび「僕はこういう最初のきっかけっていうのを考えるのが苦手なんだよ……。だから今はちょっとしたやりきった感に浸ってる訳よ」

優里「どうでもいいけど、この物語まだまだ続く予定だから、話が終わる度にそういう状態になるのだけはやめてね？」

みやび「ＯＫ、分かってるよ。それじゃあはじめていくよ！！！」

※ローラの真似をする

彰「『彰と』」

みやび「『みやびと』あれ？誰も突っ込んでくれないの？僕の渾身のローラギャ…」

優里「『優里チャンのっ』」

彰&みや&優里「『あとがき対ＢＡＮＧ～番外編～！！！』」

彰「さてさて、今回はあとがきスペースを飛び出して、豪華な拡大版でお送りしています」

みやび「番外編１回目の今回は、水音ラル先生から以前いただいていた質問、ライダー達のスペックについてもズバズバッと答えて行きますよ？」

優里「ではさっそく、まずは氷室彰所長、ゼントルのスペックからですっ」

○氷室彰（ひむろあきら）／仮面ライダーゼントル
２５歳　１８５ｃｍ　６５ｋｇ　地下科学研究所の現所長兼、科学者。天パの黒髪で所々跳ねていてる。センチメントメモリーの研究をしており、ネガティアやメモリーについていろいろな事を知っている模様。またメモリー以外に様々な分野にも興味があるようで、時折研究をしている（噂ではノーベル賞を取れるくらいの発明品もあるらしい）。基本的に黒のジーンズに白シャツというファッションを好んで着る（本人曰く、「科学者ですから清楚にいかないと」らしい）。他人の名前を言う時に「クン」や「サン」などカタカナ表記になる。努力家で頭が切れるが、性格が優しすぎる為に１人で何でも背負いこんでしまう。身近にいる大切な誰かが傷つくことをひどく嫌っている。生身での戦闘も得意で特に剣術に秀でている。ゼントルにもその特性が反映されている。一人称は「僕」。

○仮面ライダーゼントル

身長：２０５？
体重：８８？
パンチ力：３．５ｔ
キック力：５ｔ
ジャンプ力：一跳び２５ｍ
走力：１００ｍを６．０秒

　氷室彰が『ゼントル』のセンチメントメモリーに内包された『優しさの情報』を具現化した『カラードライダーギア』という武装装束を纏った姿。
甲冑の騎士を模した青い身体をしていて、『Ｚ』の形を崩したような複眼はオレンジ色をしている。
ある理由で、彰が装着者になる事を見越して作られたため、彼が得意とする剣術に特化した設計になっている。
必殺技（ファイナルスキャン）
高熱を帯びたゼントルドライバーで相手を十字に切り裂く（名称不明）。

みやび「はいはいぃぃぃ！！次は笹原翔とブレイヴだぁぁぁん！！！」ビシッ（―”―）／

彰「みやびクン？そこで全力スライディングしても読者の人達には見えませんよ？」

優里「っていうかスライディングしてたの……なぜ？」

○笹原翔（ささはらしょう）／仮面ライダーブレイヴ

２０歳（早生まれ）　１８２ｃｍ　６０ｋｇ　本作の主人公。赤毛混じりの黒髪でくせ毛。無職で家もなかったため、幼なじみの旭鈴奈の叔母である奈津子が営んでいる喫茶店に住み込みで働いている。氷室彰と出会ったことがきっかけでネガティア達との闘いに身を投じていくことになる。ド真っ直ぐな性格で、困っている人がいると誰でも助けに行ってしまう。そのせいでかなり損してしまうこともしばしばあるが、本人に悔いはない様子。鈴奈とは幼稚園の頃からの幼なじみだが、鈴奈の好意にはまったく気付いていない。一人称は「オレ」。

○仮面ライダーブレイヴ

身長：１９５？
体重：８５？
パンチ力：４ｔ
キック力：６ｔ
ジャンプ力：一跳び３０ｍ
走力：１００ｍを３．０秒

笹原翔が『エレメント』のセンチメントメモリーに内包された『疾風の情報』を具現化した『カラードライダーギア』という武装装束を纏った姿。
流れる風を模した緑色の身体をしていて、スピードに特化したフォルムになっている。
素早い動きと身軽さを活かした格闘が得意とする。また、左腰にマウントされている短剣『ガンズブレイバー』を併用するなど、オールラウンドな戦闘スタイルを持っている。

必殺技（ファイナルスキャン）

『ツイストサイクロンキック』
両足に強風を纏わせ、身体を回転させながら跳び蹴りを放つ。

みやび「こんな感じです」
優里「変身してた時の笹原さん……まるで別人だったねっ」

彰「はじめてとは思えない気迫でしたよ」

みやび「鈴奈が見たら胸キュンで卒倒しそうだね。そういう場面見てみたいなぁ」ニヤニヤ（ω'）

彰「……書いているのはアナタですよ？」

みやび「……そうでした」

優里「あっ、そういえばブレイヴ達の名前の前に、『カラードライダーギア』っていうのがついてたけど、あれの説明ってまだだったよねっ？」

みやび「あぁ、それについては次の第5話でちょっと出る……かも」

優里「ノープランかっ！！」

みやび「いやいや、冗談だよ……。ちゃんと考えてますからぁ。そんな怖い顔しないで～！！」ヒイッ（ノ＝Д＝；）

彰「……すいません。話が逸れてきてます」

みやび「お、おうっ！！そうだった！！まったく……、誰だ？たらたらと話を脱線させて番外編長引かせようとしているのは……」
優里「あんたの事だよこのダメ作者ぁ！！！」※優里チャンパンチ
みやび「ぎゃふうぅぅぅぅ……ん」※作者、星になる
彰「飛んでっちゃった……。っていうかやられる時のセリフ、古っ！！今どき使わないでしょ！？」
優里「それではまた次回っ！！お楽しみに～」＼（o＜∀＜o）
彰「そして何事もなかったかのようにサヨナラしちゃったぁ！？（大丈夫なのか、この3人で……）」

あとがき対ＢＡＮＧ～番外編～（後書き）

うぅ、イタタ……。

あ、どもども、みやびわたるです。

優里ちゃんのパンチで此処まで吹っ飛んできました。
あばら2、3本いっちまったな……（パンチだけならネガティア倒せるかも……）。

しかし、1体のネガティア倒すのに4、5話かかるんだよな……。
今一番の心配事はやっぱりＴＰＰですね。次のネガティアが出てきて、倒しきる前に打ち切りはイヤだな……。うん。（ーπ－；）

ではまた次回。
質問、感想も募集中です。お楽しみに！！！／（＾－＾）ｏ

第5話．ＳＥＮＴＩＡＩＤ～嵐と象の腕～（前書き）

前回までの『仮面ライダーブレイヴ』は……

彰「アナタの所有者は……誰なんですか？」

スケルトン『ごちゃごちゃうるせぇなぁ、青いのぉ！！』

完全態となったスケルトン・ネガティアと対峙するゼントル。が、徐々に劣勢に追い込まれていく。

優里「久しぶりに“適合者”が見つかったんだよ？ウチだって見たいんだもん！！」

翔「見たいんだもんって……」

優里「所長があなたを助ける時、変身してたでしょ？あなたにはそれと同じ事をやってもらいますっ！！」

彰の助手、小山優里の口からでた突然の提案。

彰「もう僕は、１人で戦わなくていいんですか？」

翔「当たり前っすよ！！……変……身！！！」

翔「オレは彰さんと一緒に戦います。襲われている人達も、襲って

いるネガティアも救うために……」

第5話．ＳＥＮＴＩＡＩＤ～嵐と象の腕～

「ううわああぁぁぁ……！！」

無機質な室内に鈍い音が響く。たちこめる白煙の中で、ブレイヴこと笹原翔は頭を抑えながら倒れてもがいていた。

『ちょっ、翔クン！？大丈夫ですか！？』

スピーカーから聞こえてくる氷室彰の声に反応したのか、ブレイヴはヨロヨロと立ち上がった。

「ま、まぁ何とか……。タフが取り柄なんで、大丈夫です」

『ふーん。じゃあ、まだまだできるんだよねっ？笹原さん？』

頭をさするブレイヴのいる部屋はかなり広く、全体的に白で統一されている。室内に物はなく、唯一壁に強化ガラスが1枚貼られているだけだ。その向こう側には様々な機械があり、彰、そして赤毛で今どきギャルのような格好をした小山優里がいる。優里は意地悪そうな顔でニコリと笑ってブレイヴに毒づいている。

「……はいはい、やりますよ」

ブレイヴは不服そうに優里に一瞥を投げると、片手を床につけて前傾姿勢をとった。

「……よしっ……いいくぜぞぉぉ！！」

思いっきり地面を蹴り出した瞬間、ブレイヴは僅かな残像だけを残して姿を消した。

「笹原さん気合い入りすぎ……」

ブレイヴの様子を見ていた優里はボソリと呟いた。

「それだけ張り切っているという事ですよ」

彰はニコニコしながら、様々な計器を計り取っている。

スケルトン・ネガティアとの戦いから1週間が経ち、ブレイヴの適合者となった翔は喫茶店『サン・ライズ』の手伝いをする傍ら、彰達の研究所に通い、所長の彰にメモリーやネガティアについて教えてもらっている。あまり心配をかけさせないようにするため、鈴奈や奈津子には内緒にしているらしい。

「それにゼントルが修復中の今、翔クンには一刻も早くブレイヴに慣れてもらわないといけません……。今日の“数種類のセンチエイドメモリーを使いこなせるようにする”っていう目標だって、普通に考えればかなり急いでる方です」

1週間前、スケルトンの完全態によって破損したゼントルの修復は難航していた。そのダメージは装着者である彰にも響いていて、完治して戦闘ができるようになるまでかなりかかるらしい。そのため、戦闘全般は翔が、参謀役は彰というように役割分担をする事になっ

たのだ。

この日、研究所の中にある実験室では、ブレイヴが戦闘補助用のメモリー、センチエイドメモリーの練習をしていた。翔が彰から、様々なメモリーを組み合わせる事で、ブレイヴの可能性を十二分に広げられると聞いたからだ。

「うおぅ、うぁっ！！あぶ、危なっ！！」

しかし、音速の移動能力を付加する『ソニック』のメモリーを使用していたブレイヴは、なかなかスピードをコントロールする事ができないでいる。方向を変えようにもにも勢いを殺せずに壁に激突してしまうのだ。

「うっ……酔った」

「翔クン、ソニックは体重移動とステップをきちんとしないとうまく扱えませんよ？」

またも壁に激突し、フラフラになったブレイヴに、実験室の中に入った彰は苦笑いしていた。

「まったく……。ソニックより難しいメモリーは簡単にできてるのにっ、なんでできないの？」

彰に続いて、呆れ顔をした優里が入ってくる。変身を解除した翔は、

そのまま大の字に寝転がってしまった。

「エレメントと一緒に使った時の速さは半端ないっすよ……」

「エレメントの“疾風”の情報とソニックの“音速”の情報が相乗効果を生み出しているんだと思います。まぁ、エレメントだけでも十分速いですから」

「はぁ……」

翔は腰のスロットからソニックのメモリーを抜き、それをしばらく眺めていた。前に、メモリーは感情に反応する鉱石『フィーリウム』でできていると聞いた。自分はこれが原因で非日常に飛び込んで、これを使ってたくさんの人達を護るために戦っている。もし、彰さんがあの時言っていたように、この技術を平和的に使えていたら……。

「あっ、そういえば彰さん。2、3日前に、ブレイヴとゼントルって同じ場所で作られたって言ってましたよね？その時は聞けなかったけど、どこで作られたんですか？」

「あぁ、“カラードライダーギア”の事ですね」

彰は床にあぐらをかいて、斜め上を見ながら話し始めた。

「キミには以前、センチメントメモリーはネガティアへの対抗力だと説明しましたよね。“カラードライダーギア”とはある研究所で行われていた、センチメントメモリー内のフィーリウムを戦闘でスムーズに活用する事ができるパワードスーツの量産を目的とした開発計画の名前です」

「量産？……って事はまだあるっていう事ですか？」

翔の問いに対して、彰は少し困った顔をした。

「正確には“あるかもしれない”です。ギアは7体を予定されていたのですが、ゼントルとブレイヴ、そしてもうひとつのギアが大方完成した時点で計画が中止になってしまったんです。後のギアは行方知らず、完成しているかどうかわかりません」

「えっ、なんで中止なんかに……」

翔が彰に聞こうとした時、突然研究所に警報音が鳴り響いた。優里は素早くパソコンに近づいて画面を凝視する。

「所長、ネガティアですっ！！松越デパートの5階、立体駐車場です！！」

彰は頷きながら、翔に声をかける。

「翔クン、行けますか？」

「もちろん！！！」

翔は即座に立ち上がり、ニッと笑ってサムズアップを返す。腰にベルトを付けたまま走りだし、あっという間に実験室を出ていってしまった。

人通りの多い商店街。買い物をする主婦達で賑わっている。しかしそこに、場にまったくそぐわない者が1体暴れている。

『ブゥオオオオ！！！』

異形は目の前にある建物をめちゃくちゃにしながら、商店街の道を闊歩する。人々は必死に逃げ回る。巨体から繰り出されるその破壊力は普通ではない。

そんな中、

「うぅおおおりやぁぁぁ！！」

『ブゥオフ！？』

1人の男がバイクにまたがり、異形の背中に前輪を猛スピードで突っ込ませた。異形はバランスを崩してよろけるが、片膝をつく程度だった。バイクから降り、ヘルメットを外した男、笹原翔は異形を凝視する。

「うひゃぁ、ドクロの次はゾウかよ……。ってか普通のゾウよりデカイな！！」

人とゾウを掛け合わせた姿をした異形、エレファント・ネガティアはとにかく大きかった。2本足立ちで3メートルは優に越える体格で、長くて太い鼻。電柱より2回り程太い手足。どれも桁外れだ。

『ブオオオゥ！！』

「彰さんの話じゃ、人間の言葉が喋れない奴は“鎧態”なんだっけ……。とりあえずぶっ壊すか！！」

翔は腰のベルトについているレバーを引き出し、その反対側にあるスロットに緑色のメモリーを差し込む。

［エレメント……スタンバイ］

バックルの中央が緑色に発光し、エンジンに似た音が響き渡る。翔は引き出されたレバーを掴み、再びエレファントを睨み付けた。

「……変身！！」

［ブレイヴ……セットアップ］

翔がレバーをバックルに押し戻すと、バックルの緑色の光が翔の身体を包み込んだ。そしてまばゆい光が飛び散った時、翔は疾風を模した戦士に姿を変えた。

「センチエイドメモリーの特訓成果、見せてやるぜ！！」

ブレイヴは銀色のメモリーを1枚取り出し、腰のスロットに差し込んだ。

［フィスト……プレスキャン］

電子音と共にバックルから銀の電流が走り、ブレイヴの両腕で滞留する。ブレイヴはボクサーのような構えを軽くとると、勢いよくエレファントに突っ込んで行く。

「うんどりゃぁぁ！！！」
エレファントは巨体故にスピードはないようで、ブレイヴが放った右ストレートを腹部にもろに食らってしまった。しかし、エレファント自身は軽くよろけただけでビクともしない。そして逆にブレイヴが拳を押さえて痛がっている。

「痛ってぇ～！！コイツ固すぎだろうが！！」

エレファントは目の前で手をさすっているブレイヴを見つけると、大きく息を吸い込んで腹を膨らませた。
『ブァァァァァ！！』

そして鼻をブレイヴに向けると、息を吐き出すように巨大な水の弾を打ち出した。

「ん？ぅおおあぁ！？」

水流弾をダイレクトに食らったブレイヴは吹き飛ばされ、大きく跳ねながら長い距離を転がった。

「うぅ……痛ってぇなぁ。３０メートルは飛ばされたな、こりゃ……」

ブレイヴはヨロヨロと立ち上がり、取り出した緑色のメモリーを腰のスロットに差し込んだ。

［ストーム……プレスキャン］

緑色のノイズがブレイヴの全身を包み、周囲に風が吹き始める。

「たしか、メモリーには相乗効果があるんだよな……。その硬い身体も、“疾風”と“嵐”のパンチ食らったらどうなんのかな！？」

バックルのレバーを引き出したブレイヴは勢いよくレバーを押し戻した。

［エレメント…ストーム…フィスト……ファイナルスキャン］

吹きわたる風が勢いを増し、全身を包んでいたノイズが右手に一気に集約された。

「たかだか“鎧”に、手こずってる場合じゃ……ねぇんだよ！！！」

ブレイヴが地面を思いっきり蹴り出すと、３０メートル強あったエレファントとの距離は一気に縮まった。

「食らえ！！“バスターストームパンチ”！！！」

ブレイヴは先程攻撃した腹部にもう一度右のパンチを入れた。今度のパンチは失速することなくエレファントの身体に深く突き刺さる。

『ブゥオ…ブァアアアア！！』

エレファントの全身にヒビが走り、断末魔の叫びを上げたエレファントは火花を散らしながら爆散した。

「ハァ……、よ、よっしゃ……」

ブレイヴは腕を上げた瞬間、ふらっとよろけて倒れてしまった。装着者の体力の低下を感知したのか、強制的に変身は解除された。

「あっ、翔クン。遅くなってすいません！！」

「……ん、あ、彰さん」

彰は瓦礫の山と化した商店街に到着し、道に倒れている翔に話しかける。

「見る限り、倒せたみたいですね」

「今回はかなり強いです。前回のドクロよりも……」

「……みたいですね。“鎧”でここまでとは」

彰は周囲の有り様を見て、顔をしかめる。たかが“鎧”を相手にしただけで、翔のこの消耗……。もしかしたら今回のネガティア、相当ヤバイかも……。

彰はさらにネガティアの情報を聞こうと翔の方を見た。だが、

「……ｚｚＺＺＺ」

「……翔クン？……まさか寝ちゃいました？うそ、気絶とかならまだしも、さっきまで起きてたじゃないですか。道のど真ん中で寝れるって……ある意味すごい人だな……」

思わず苦笑いしてしまう彰であった……。

第5話．ＳＥＮＴＩＡＩＤ～嵐と象の腕～（後書き）

彰「『彰と』」

みやび「『みやびと』」

優里「『優里チャンのっ』」

彰&みや&優里「『あとがき対ＢＡＮＧ』！！」

彰「今回は、“カラードライダーギア”についてですね」

優里「今話で出てたねっ。たしか7体いるっていう話だけど……」

※みやびをにらむ

みやび「だ、大丈夫だよこれは！！変更とかはしないよ～」（」　。□　。；）」

優里「ほんとに～！？書くの大変だから辞めるとか言ったら“ブロウクンナックルＶｅｒ．優里”ですからね」ギロリ（ー”　ー；）

みやび「こわっ！！そして何故イクサナックルもってるの！？」

彰「まぁまぁ優里チャン、少しはみやびクンを信じてくださいよ」

優里「……チッ」

みやび「ひいぃぃ！！」
彰「ハァ（ほんと大変だな、この２人）……、そういえばこの『仮面ライダーブレイヴ』には章ごとの名前があるらしいですよ」
みやび「そ、そうなんだよ！！前回までの１～４話までが“疾風の適合者編”で、今話からが“紅の狙撃手編”っていうんだよ」
彰「パソコンじゃないと章割りが出来ないんですよね……残念」
優里「狙撃手ってどういう事なの？」
みやび「おおっと！！これ以上はネタバレになっちゃうから秘密だ！！それじゃあ今日はここまで！！」
彰「感想もお待ちしてますよ～」
彰＆みや＆優里「お楽しみに！！」＼（＾－＾）ｏ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8010x/

仮面ライダーブレイヴ

2011年12月11日17時51分発行